The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

アウンサンスーチーが用いたパーリ仏典
——仏教の社会化と民主主義の諸原理——

田　﨑　國　彦

0．本稿の課題——スーチーが開く「仏教研究の新たな地平」

ドォ・アウンサンスーチー（スーチーと略称）は，「精神の革命［a revolution of the spirit］」と呼ぶビルマ民主化運動を主導するなかで，仏教（宗教）と民主主義（政治）は対立・矛盾しない，宗教と政治は分離しない，慈悲［compassion and loving-kindness］の顔をもった民主主義を目指すなどと述べ，また社会参加仏教（エンゲージド・ブディズム）を信奉するとも言う．1962年以来の軍政下にあって民主主義の経験が殆どなく，多くが上座仏教徒（テーラワーダ・ブディスト）であるビルマの人々に，**パーリ仏典**を使用しつつ〈**民主主義の諸原理**〉などを語り続けてきた．スーチーは，特に後出1.の小論（エッセー）Democracy（略称）では，仏教と関係づけて，民主主義の大前提として個人の尊重，多様な民主主義の共通原理である「民主主義の諸原理」として法の支配，2.で扱う人権，権力の分立，対話の尊重などをあげている（*Freedom* 1995, pp. 167–79）．

筆者は先の二拙稿（略号は田﨑2013aと田﨑2013b）を前提に，「スーチーは軍政弾圧下の民主化運動という社会的政治的な状況（コンテキスト）の下で，**パーリ仏典の何を・どのように用いたのか**」の調査と分析を行ってきたが，この過程で本稿が〈**仏教の社会化**〉（定義は3.）と呼ぶ「仏典を活用する新たな方法論」が明かになった．

本稿の課題は，こうした社会化の一事例（ケース）である〈**仏教的人間観の社会化**〉の解明にある．そして，個別的な事例研究（ケース・スタディ）（慈悲や四諦や業などの社会化）と，前稿で**ガルトゥングの平和学**を導入して明かにしたスーチーの民主化運動の全体像（暴力の三形態を低減・不在化して平和の三形態から成る社会を構築する運動…2.を見よ）が協働（コラボ）して，〈**仏教平和学**〉の地平が開かれる．なお，本稿の拡大詳細版は『東洋学研究』第52号に掲載予定．後出のスーチーの言説は筆者が訳出し，パーリ仏典は原則的にPTS版を用いた．注記は最低限を割注にした．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

1．ビルマにおける伝統と近代の総合の試み——〈仏教の社会化〉の祖型

Burma and India 1987（略号…1988年8月の運動参加以前の著作）は，英国植民地下のインドとビルマ（1886年ビルマ併合から1948年独立まで）における知的生活を比較し，東西の知的伝統の融合がなぜインド（ベンガル・ルネサンス）では起り，ビルマ（ビルマ・ルネサンス）では起らなかったのかを史的に辿って明かにしている．この問題は，ビルマ国が本来もつ潜在能力（ポテンシャル）を社会・政治・経済的に発揮できずに民主化運動の発生にまで至った理由の一つである．スーチーは同論文の中で，ビルマ人がなぜルネサンスに失敗したのかを，こう簡潔にまとめている．

> 言説A：〔ビルマにおける〕伝統と近代の，つまりはビルマと西洋の真の総合［the true synthesis of traditional and modern, Burmese and western］は，その世代によっては達成されなかった．彼らは，新しい思想を受け入れ易い伝統的な用語で翻訳しなかったし，古い概念も近代的な文脈（コンテキスト）の中で見直しもしなかった．（*Freedom* 1995, p. 115；『自由』193頁…本稿の引用文中の下線，番号，〔〕と（）と〝〟内は田﨑の補い）

ビルマ・ルネサンスを結実させるためには，スーチーの優れた理解であるが，波線部にあるように「**新旧の双方に手を加える必要**」があった．ビルマ人は，新しいもの（異文化）を翻訳したりして同化・吸収し，他方自らの伝統（自文化）に対しても守るだけでなく，客観的に見直したり余分な枝葉を落して活性化したりしなければならなかったが，こうしたことが共に実行されなかった．

このように *Burma and India* 1987で検証された失敗の試みは，民主化運動で今度はスーチー自身が上座仏教という伝統と，民主主義という新たに導入せんと求める西洋を，「**どのように総合・融合するか**」という課題——言説Aの実線部「ビルマと西洋の真の総合（ジンテーゼ）」の現代版・再演版——に立ち向かう時，仏教と民主主義の諸原理の**親和性**をもとに「**パーリ仏典をどのように用いるか**」という方法論（仏教の社会化）の祖型・雛形として再び活用されることになる．この意味で民主化運動は，ビルマの過現未を生き生きとつなぐ国家を新築するというビルマ・ルネサンスの試みである．上述した方法論は2.で述べるように，運動参加後から1989年7月の第一回自宅軟禁までに書いた「初期三部作」（*Freedom* 1995所収），特に“In Quest of Democracy”（民主主義を探究して…**Democracy**と略称）で確立される．

2．仏教的人間観の社会化——東・西の人間観の親和的弁証法

第二期ミャンマー軍政は，リー・クアンユーや中国指導者のアジア的価値論に

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

与し，独裁体制を正当化するために，民主化運動の中心的要求である人権と民主主義を「**西洋人が創ったもので，ビルマの伝統的価値観に合わない**」と批判した．これに対し，スーチーはDemocracyの中で，ビルマは1948年の国連総会で世界人権宣言（**人権宣言**と略称）の採択に賛成したとし，以下の〈**仏教の人間観**（①②）〉をあげて反論する（アジア的価値論は文化的暴力で田﨑2013aが詳論，*DN.*, no. 27. *Aggaññasuttanta*（vol. 3）を使った民主主義批判への反論は別稿で扱う）．

> **言説B**：仏教はビルマの伝統文化の基盤で，人間に最高の価値を置き，すべての存在者（一切衆生）の中でも，ただ人間だけが仏陀の境地［Buddhahood］という最高の状態を達成できるとする．人間各自は，①自らのうちに，本人の意志と努力によって真理（dhamma；法）を覚る潜在能力［the potential to realize the truth］をもち，また②真理を覚ることに応じて他の人々を助けることができるのである．この故に，人間の生命は限りなく貴い［precious］．（*Freedom* 1995, p. 174；『自由』262頁）

文中の①は，演説では近い内容で「努力すれば仏陀に成れる」（『1988–9年演説集』71頁）と，初期三部作の一つ“Freedom from Fear”では「完璧（パーフェクション）さの追求」（*Freedom* 1995, p. 185；『自由』278頁…perfectionは私見ではpārami（＝pāramitā）の訳語）として，また上記の①②は同内容でより明確に「覚り［enlightenment］や智慧［wisdom］」（*Hope*, p. 195；『希望』206頁…田﨑2013bの**言説J**）の語を使用して主張される．これは，スーチーにとっては運動の思想的基盤となる仏教的人間観，〈**自己完成（覚り）への潜在能力（ポテンシャル）をもち，この過程で獲得した慈悲と智慧を他者救済に活用して生きるという人間観**〉であり，「六道輪廻説に立った比較による貴重さという通念的人間観」からは視点と重心をずらして貴重から尊重へと傾いている．輪廻説の人間観は，*Dhammapada*, No. 182の「人間の身を獲得すること［manussapaṭilābho］は難しい」や，三帰依文の「人身受け難し」に見られる．スーチーは上記引用文に続けて，この人間観を「梵天の住処から落とした針が地上の針に当たる方が，人間に生まれるよりも簡単である」（出典未確認）という仏典の比喩でも説明する．輪廻説による人間観の比喩は，*MN.*, no. 129. *Bālapaṇḍita-sutta*（賢愚経）の「目の不自由な亀の譬え［kāṇakacchapopamā］」，すなわち「一度悪処に堕した愚者が人間に生まれるのは，百年ごとに一度浮上する目の不自由な亀が海中に投げ込まれた一穴ある軛（くびき）［ekacchigaḷaṃ yugaṃ］の穴に首を入れるよりももっと難しい」（*MN.*, vol. 3, p. 169）である．

Democracyでは，上の**言説B**の後に，〈**理性的に自ら判断して生きる主体的存在という人間観**〉も提示されている．仏教は，正統教義を遵守して受け入れるよ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

うに命じるキリスト教とは異なり，「より自由な態度で［with the more liberal Buddhist attitude］」，宗教の教えや情報などを自ら判断して受け取ることを推奨する．*AN*. 3. 65. *Kālāma-sutta*（カーラーマ族に説いた経典）の一節，「疑い，確かではないとするのは正しい……伝聞，伝承，風説……によって得られたことに依拠するな．或る事柄が悪い，間違っていると自分で知る時は，あなたはそれらを捨てなさい（これと逆の場合は受け入れよとなる）」（パーリ仏典は *AN*., vol. 1, p. 190）を引用する．

次に，スーチーは人権宣言の第一条を民主化運動の立場から，**〈人権宣言の人間観（①〜④）〉**を提示する（下記と同内容文は『1988–9 演説集』132 頁にも出る）．

> **言説 C**:〔軍政は，人権宣言の第一条にある〕「①生来の尊厳［dignity］と②平等で奪えない人権」を認める，「③人が皆理性と良心を賦与されていること」を受け入れる，普遍的（ユニヴァーサル）な「④同胞の精神［spirit of brotherhood］」を推奨するという考え方が，ビルマ固有の価値観と対立すると言うが，ビルマ人にはそれらがどうして対立するのか謎である．（*Freedom* 1995, p. 175;『自由』263–4 頁…④をスーチーは慈悲で解釈する）

以上にあげた仏教と人権宣言の人間観は共に軍政に踏み躙られ，現にビルマ社会を支配しているのは**〈軍政の人間観〉**（これ自体が文化的暴力である）である．

> **言説 D**: 独裁的政府は，まさにこの貴い人間［the precious human］が国家を構成していると認めていない（前掲の仏教の人間観）．彼らは，市民たちを思いのままに操れる大きな塊［大衆; mass］，すなわちただ主体性（かお）のない，思慮のない，そして無力なだけの大きな塊と見なしている．（*Freedom* 1995, p. 174;『自由』262–3 頁）

国民（国家の付属物）は，恐怖と不信に包まれて偽ることを身につけ，言わば間（あいだ）という差異なき塊となって沈黙し続ける（*Freedom* 1995, p. 175;『自由』264 頁…スーチーは潜在能力の開花として人間の多数性［diversity］を主張する）．**言説 D** は，人間の差異による多数性・複数性を恐怖で奪い支配していく全体主義を語る**ハンナ・アレント**の言説に通じている（大久保和郎/大島かおり訳『全体主義の起源 3』みすず書房，1995 年，292 頁）．

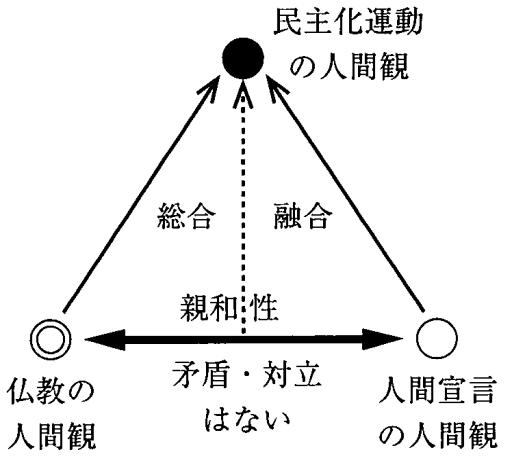
以上の三人間観を**〈仏教的人間観の社会化〉**という視点から作った，下の**〈図〉**に従って整理する．スーチーは，仏教と人権宣言の両人間観を矛盾・対立ではなく親和的な関係にあるとし，暴力支配という社会的状況（コンテキスト）――**ガルトゥングの平和学**では暴力の三形態（直接的・構造的・文化的暴力）による支配――の下で，総合・融合して「新たな人間観（民主化運動の土台となる人間観，スーチーの人間観，非暴力による民主化運動が見出した新たな価値観）」を創りあげている．そして，この人間観は，運動として行動化され，社会変容，つまりは「平和（直接的・構造的・文化

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

的平和）の構築」へと展開していく（思想の行動化はスーチーの信条）．具体的には，一人ひとりに語りかけるスーチーの演説や，人々を民主主義を創り担い維持し向上させる主体とするスーチーの位置づけに現われ，人々のエンパワーメント（いわゆる国民参加）の呼びかけとなり，国民主権の倫理的基盤ともなっている．またここには，宗教（仏教）と政治（人権を保障する民主主義）が分かち難く結合し，スーチーが宗教と政治は共に人間に関わることとして分離しない思想的な根拠がある．

〈人間観の親和的弁証法〉



3．最後に――〈仏教の社会化〉から〈仏教平和学〉へ

本稿提示の**〈仏教の社会化〉**とは，2. で一事例を検討しただけだが，伝統的に仏教が主張してきた「内面へと沈潜して煩悩を克服するという自己完成のベクトル（社会性を欠く）」の他に，自分が現に今生きている「社会（家族・地域・国際・地球という各社会，暴力の三形態を抱えた社会）」という場・状況（コンテキスト）に伝統的な仏教の概念・教義・教説，つまりはブッダの教えを位置づけて見直し，さらには行動化して，平和構築に向けて社会変革に活用しようとする営み」，端的には「仏教（学者を含む仏教者）が自己変革と共に社会変革というベクトルをもつこと」である．社会参加仏教（エンゲージド・ブディズム）の基調・基礎ともなる．最も肝要な点は，改めて「社会」を強調することであり，society は元来東洋にはなかった概念である．この〈仏教の社会化（慈悲の社会化などの諸事例を含む）〉は，ガンディーや仏教の影響を強く受けているガルトゥングの平和学とも結びついて，**〈仏教平和学〉**の構築へと展開する．

〈引用・参照した文献と略号〉は以下の拙稿に従う．田﨑國彦「アウンサンスーチーの民主化運動に見る『暴力から平和への転換の試み』――ガルトゥングの平和学を用いて――」，『実践女子大学人間社会学部紀要』第 9 集，2013 年．（https://jissen.repo.nii.ac.jp/index.php?）

〈キーワード〉　アウンサンスーチー，パーリ仏典，民主主義の諸原理，世界人権宣言，仏教の社会化，仏教平和学，ガルトゥングの平和学

（武蔵野大学仏教文化研究所非常勤研究員）

NII-Electronic Library Service